APIC26 in Nashville 参加報告

国際委員会 委員　藤本 要子

2026 年 6 月 15 日から 17 日にかけて、米国テネシー州ナッシュビルで開催された APIC Annual Conference & Exposition 2026（APIC 2026）に、日本環境感染学会国際委員会委員として参加しましたので、ご報告いたします。学会参加を通して得られた学びや現地での交流・経験を会員の皆様と共有し、今後の国際交流やさらなるコラボレーションについて、ともに考えるきっかけとなれば幸いです。

APIC とのさらなるコラボレーションに向けて

学会期間中には、2026 年度の APIC プレジデントである Kathy Ward 氏と面会し、7 月に開催予定の第 41 回日本環境感染学会総会・学術集会や、今後の継続的なコラボレーションについて意見交換を行いました。あわせて、2027 年にロサンゼルスで開催される APIC 年次大会にあわせて検討している病院・長期ケア施設見学ツアーについても説明し、今後の交流の可能性について話し合いました。

米国と日本では、社会的背景や医療制度などに違いがありますが、感染対策に携わる専門職の人材育成、研究と実践の連携、多職種協働など、両学会が共有する課題も多くあります。今後もコラボレーションを深め、国を越えて感染予防・管理に関する共通の課題に取り組んでいければと考えています。

主なセッションと学会全体の様子

学会では、APIC と SHEA（米国医療疫学学会）のコラボレーションに関するセッションをはじめ、長期ケア施設における感染対策、Hospital-Onset Bacteremia and Fungemia（HOB）サーベイランス、獣医領域における手指衛生と薬剤耐性菌対策など、幅広いテーマのセッションを聴講しました。


会場の Music City Center の様子

APIC と SHEA の連携に関するセッションでは、APIC からは Kathy Ward 氏、SHEA からは Lisa Maragakis 先生が登壇され、感染予防・管理の実務を担う専門職と、感染症診療や医療疫学を専門とする医師・研究者が、それぞれの専門性を活かしながら協働することの重要性が議論されました。研究、教育・啓発、ガイドライン策定などの領域で連携を強化することは、エビデンスに基づく感染対策をより効果的に推進するうえで重要であり、日本における専門職の連携を考えるうえでも示唆に富む内容でした。

長期ケア施設に関するセッションでは、米国の長期ケア施設における薬剤耐性菌の状況と、その予防および拡大防止に向けた対策について講演が行われました。日米の状況や施設を取り巻く背景の違いを踏まえながら、日本の高齢者施設における薬剤耐性菌対策のあり方を考えるうえで参考となる内容でした。

また、HOB サーベイランスに関するセッションでは、入院後に確認される菌血症・真菌血症を広く把握し、医療関連感染の評価や改善につなげる新たなサーベイランスの考え方が紹介されました。獣医領域のセッションでは、動物病院におけるカルバペネム耐性腸内細菌目細菌（CRE）の伝播防止を中心に、手指衛生を含む包括的な感染対策が紹介されました。人、動物、環境を一体として捉える One Health の観点からも興味深く、診療領域は異なっても、教育や組織的な感染対策などに共通する課題があることが印象的でした。

いずれのセッションにおいても、講演後にはフロアの参加者から多くの質問や意見が寄せられ、活発な質疑応答が行われていました。発表内容を一方向に受け取るだけでなく、参加者がそれぞれの施設や地域での経験を持ち寄り、講演者とともに議論を深める様子が印象に残りました。

さまざまな研究・実践の発表と APIC Research Network Event

今回の APIC でも、感染予防・管理に関する多様な研究成果や、各施設での実践的な取り組みが発表されました。Abstract Award では、日本の研究者による発表が表彰されていました。また、APIC の学術誌である American Journal of Infection Control（AJIC）の編集者が注目する演題を紹介するポスターラウンドでは、韓国の病院からの発表も取り上げられており、アジアから発信される研究や実践にも関心が寄せられていることが印象的でした。


Keynote Session が行われるメインホール

また、今年度から始まった新たな取り組みである APIC Research Network Event にも参加し、ネットワークに参加する研究者や感染管理専門職の方々と、イベントで取り上げられたポスター発表について意見交換を行いました。APIC Research Network では、感染対策担当者が日常の実践から研究課題を見いだし、研究によって得られた成果を現場へ還元することが重視されています。こうした実践と研究を結びつける取り組みは、日本における感染対策研究の発展を考えるうえでも参考になりました。

私自身も、高齢者施設における感染対策に関する研究についてポスター発表を行い、このネットワークイベントでも取り上げていただきました。ポスターを訪れてくださった方々とは、各国の長期ケア施設における制度、職員配置、感染対策担当者の役割、外部専門職との連携体制などの違いを踏まえながら、意見交換を行いました。国によ

って施設を取り巻く背景は異なる一方、共通する課題も多くみられました。互いの知見を共有しながら、それぞれの施設の状況に適した、よりよい感染対策を検討していくことの重要性を感じました。

APIC Research Network Event や自身のポスター発表を通して、米国の感染管理専門職や研究者の方々と直接議論することができ、自身の研究の意義や今後の展開を異なる視点から捉え直す機会となりました。また、感染対策の実践を研究につなげようとする取り組みに触れ、実務に根差した研究を継続することの意義を改めて認識しました。今後は、日本における感染対策の実践についても積極的に紹介し、国を越えた意見交換をさらに深めていきたいと考えています。

APIC2026 での学びと交流

今回の APIC26 への参加を通して、感染予防・管理に関する最新の研究や実践に触れるとともに、APIC との今後の連携について直接協議することができました。また、研究発表や意見交換を通して、米国をはじめとする各国の感染管理専門職や研究者とのつながりを広げることができました。今回得られた知見や現地でのつながりを、今後の国際委員会活動や、日本における感染対策の実践および研究の発展に活かしていきたいと考えています。


ナッシュビルスタイルの Kathy Ward 氏とともに

言語面では、講演内容の理解や参加者との意見交換に不安がある場合でも、必要に応じてスマートフォンの翻訳アプリなどを活用することで補うことができます。また、自己紹介や自身の研究・実践、日本の感染対策の状況について、あらかじめ要点を簡潔な英語で整理しておくと、質疑応答や参加者との交流に役立ちます。流暢な英語を話すことだけを重視するのではなく、伝えたい内容を明確に準備し、積極的に交流することが、国際学会への参加をより有意義なものにすると感じました。

さらなるコラボレーションと APIC2027 に向けて

APIC 2026 での交流に続き、7 月に開催された第 41 回日本環境感染学会総会・学術集会での APIC とのジョイントセッションには、多くの方々にご参加いただき、国際的な知見を共有する貴重な機会となりました。さらに、2027 年 6 月にロサンゼルスで開催される APIC 2027 にあわせて、米国の急性期医療機関や長期ケア施設を訪問する見学ツアーの実施に向けた準備も進めています。米国の感染対策の現場に触れ、現地の専門職と意見交換できる機会となることを目指していますので、ご関心のある方はぜひ今後のご案内にご注目ください。

こうした活動を通して、より多くの会員の皆様に国際的な知見や実践に触れていただく機会を広げるとともに、日本の感染対策に関する研究や実践を海外に発信し、国を越えて互いの経験や知見を共有し、学び合う機会をさらに増やしていければと考えています。